

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
17卷

現代短歌分類辞典

新装版17卷

通卷175

平成三年一月二十日発行	定價一六、〇〇〇円
著者兼印刷者	津端亨
発行所	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津端亨
〒345	埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六―五
	電話(〇四八〇)三八―〇〇四〇番
	振替 東京三―九三二―四

(ISBN 4-87706-175-4)

目

次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
しずまり〔静まり〕	二六	しずめーたる	一	じする〔辞する〕	三
しずまり〔鎮まり〕	三七	しずめーつ	六	じする〔持する〕	一
しずまりかえる〔静まりかえる〕	一九	しずめーつつ	七	しずれ〔雪墮・しづれ〕	三
しずまりくる〔静まり来る〕	二	しずめーて〔沈めて〕	七	しずれきーぬ	一
しずまりーし〔静まりし〕	五	しずめーて〔鎮めて〕	七	しずれーつつ	二
しずまりーて〔静まりて〕	二四	しずめーて〔静めて〕	九	しずれつづくる	一
しずまりーぬ〔静まりぬ〕	六	しずめーぬ	三	しせい〔四声〕	一
しずまりはてーて〔静まり果てて〕	五	しずめーり〔沈めり〕	四	しせい〔四生・ししょう〕	一
しずまる〔静まる・しづまる〕	二六	しずめる〔沈める・しづめる〕	五	しせい〔市井〕	九
しずまる〔鎮まる〕	二〇	しずめる〔鎮める〕	二	しせい〔姿勢〕	六
しすまれ〔鎮まれ・しづまれ〕	一三	しずもり〔静もり・鎮もり〕	三	しせい〔市制〕	四
しずまーん〔沈まん〕	二五	しずもりたてーる〔静もりたてる〕	四	しせい〔市政〕	一
しずみ〔沈み〕	二九	しずもりーて〔静もりて〕	五	しせい〔死生〕	七
しずみ〔鎮み〕	七	しずもりをり	三	しせい〔至誠〕	一
しずみーし〔沈みし〕	六	しずもる〔静もる・鎮もる〕	三	しせい〔資性〕	一
しずみーて〔沈みて〕	六	しずもれーり〔静もれり〕	三	しせい〔時世〕	七
しずみーぬ〔沈みぬ〕	三	しずもれーる〔静もれる・しづもれる〕	四	しせい〔時勢〕	三
しずみゆく〔沈み行く〕	八	しずやかに〔しづやかに・静やかに〕	五	しせい〔自生〕	三
しすみをはりーて〔沈みをはりて〕	一	しずら〔字面〕	七	しせい〔辞世〕	三
しずむ〔沈む〕	四七	しする〔死する〕	七	しせいかつ〔私生活〕	二
しずむ〔静む〕	二	しずる〔しずる・しづる・垂る〕	四	じせいする〔自生する〕	二

しせき〔史蹟・史跡〕	四	四	しぜんこじ〔自然居士〕	一	七	じぞうがだけ〔地蔵ヶ岳〕	二
しせき〔咫尺〕	二	四	しぜんし〔自然死〕	二	七	じぞうぎき〔地蔵崎〕	二
じせき〔自責〕	四	四	しぜんしゆぎ〔自然主義〕	一	七	しぞうさま〔地蔵様〕	四
じせき〔自席〕	一	四	しぜんしゆぎうんどう〔自然主義運動〕	二	七	しぞうせん〔思想戦〕	二
しせつ〔使節〕	三	四	しぜんしんしよく〔自然侵食〕	一	七	じぞうそん〔地蔵尊〕	一四
しせつ〔施設〕	二	四	しぜんせき〔自然石〕	九	七	じぞうだけ〔地蔵岳〕	三
じせつ〔時節〕	五	五	しぜんでつり〔自然哲理〕	一	七	しぞうてき〔思想的〕	二
じせつ〔自説〕	二	五	しせんどう〔詩仙堂〕	三	七	じぞうどう〔地蔵堂〕	一
しせーり〔死せり〕	一六	五	しぜんなべ〔慈善鍋〕	三	七	じぞうとうげ〔地蔵峠〕	三
しせん〔視線〕	五	五	しぜんばえ〔自然生〕	二	七	じぞうまつり〔地蔵祭〕	二
しせん〔四川〕	八	七	しぜんぼく〔自然木〕	二	七	しぞうぼさつ〔地蔵菩薩〕	一六
しせん〔支線〕	三	七	しぜんりん〔自然林〕	三	七	じぞうばん〔地蔵盆〕	二
しせん〔死線〕	六	七	しそ〔紙塑〕	一	七	しぞかしむ〔退かしむ〕	一
しせん〔死戦〕	一	七	しそ〔紫蘇〕	一六	七	しぞき〔退き〕	一
しせん〔指尖〕	一六	七	しそ〔始祖〕	三	五	しそく〔子息〕	三
しせん〔支線〕	三	六	しぞ	三五	五	しそく〔四足〕	二
しぜん〔自然〕	一三	六	しそう〔詩想〕	二	八	しそく〔四則〕	一
じぜん〔慈善〕	二	七	しそう〔思想〕	二五	八	しぞく〔士族〕	五
しぜんえん〔自然園〕	一	七	しそく〔死相〕	八	八	しぞく〔氏族〕	一
しぜんかい〔自然界〕	二	七	しそく〔詩草〕	一	八	しぞく〔退く〕	六
しぜんかがく〔自然科学〕	一	七	じそく〔寺僧〕	六	八	じそく〔時速〕	七
しぜんかがくけんきゆうじよ〔自然科学研究 所〕	一	七	じぞう〔地蔵〕	七	八	じそく〔自足〕	七
しぜんげんしょう〔自然現象〕	一	七	じぞうえ〔地蔵会〕	二	八	じぞく〔持続〕	六
			しそくか〔思想家〕	一	八	しそん〔子孫〕	二

じそん〔自尊〕	一	一九	じだい〔次代〕	二	一九	したおれ〔下折れ〕	四	四	二〇三
じそんしん〔自尊心〕	五	一九	じだいいしき〔時代意識〕	四	一九	したがい〔従い〕	四	四	二〇三
した〔下・もと〕	三四三	一九	じだいかんかく〔時代感覚〕	二	一九	したがいて〔従いて〕	五	五	二〇三
しーた	五	一九	じだいいこうしょう〔時代考証〕	一	一九	したがいうけーり〔従い行けり〕	一	一	二〇三
した〔舌〕	二四	一九	じだいきくご〔時代錯誤〕	一	一九	したがう〔従う・したがふ〕	七	七	二〇三
した〔心〕	二	二七	じだいいしだい〔次第次第〕	四	一九	したがえーり〔従えり〕	一	一	二〇三
しだ〔耳朶〕	二	二七	じだいいしゆぎ〔事大主義〕	一	一九	したがえーる〔従える〕	二	二	二〇三
しだ〔羊齒〕	六六	二七	じだいいしよく〔時代色〕	一	一九	したがき〔下書〕	四	四	二〇三
しだ〔時〕	一	二八	じだいそう〔時代相〕	一	一九	したかげ〔下陰・下蔭〕	三九	三九	二〇三
じた〔自己〕	一	二八	じたいーて〔慕いて〕	二	一九	したかぜ〔下風〕	五	五	二〇八
したあご〔下顎〕	一	二八	じだいに〔次第に〕	二七	一九	したから〔舌辛〕	一	一	二〇八
しない〔姿態〕	三〇	二八	じたいほ〔下庵〕	二七	一九	したがりがり〔下刈り〕	一	一	二〇八
したい〔支隊〕	一	二八	じたいほんぶ〔支隊本部〕	一	一九	したき〔下樹〕	二	二	二〇八
したい〔死体〕	四	二八	したう〔慕う・慕ふ〕	三	一九	したぎ〔下着〕	六	六	二〇八
したい〔肢体〕	三三	二八	したうち〔舌打〕	九	一九	したぎ〔下木〕	三	三	二〇九
しだい〔私大〕	一	二八	したえ〔下辺〕	六	一九	したきよめ〔下清め〕	一	一	二〇九
しだい〔次第〕	七	二八	したえ〔下方〕	二	一九	したきりすずめ〔舌切雀〕	一	一	二〇九
しだい〔至大〕	一	二八	したえだ〔下枝〕	二五	一九	したく〔支度〕	四	四	二〇九
じたい〔事態〕	二〇	二八	したえまし〔下笑まし〕	一	二〇	したく〔仕度〕	四	四	二〇九
じたい〔自体〕	三	二八	したえみ〔下笑〕	五	二〇	したく〔拉く〕	二〇	二〇	二〇九
じたい〔字体〕	一	二八	したおとこ〔下男〕	三	二〇	したく〔自宅〕	二	二	二〇九
じたい〔辞退〕	二	二八	したおび〔下帯〕	二	二〇	したくさ〔下草〕	二五	二五	二〇九
じだい〔時代〕	三〇	二八	したおもひ〔下思ひ〕	三〇	二〇	したくさかり〔下草刈り〕	二	二	二〇九
じだい〔地代〕	一	二九	したおもふ〔下思ふ〕	五	二〇	したくす〔仕度す〕	一	一	二〇九

したくする〔仕度する〕	四	三四	したしみ〔下凍〕	二	二五	したため一つ〔認めつ〕	一	二七四
したくちびる〔下唇〕	二	三四	したしみて〔親しみて〕	五	二五	したたらず〔滴らす〕	四	二七四
したぐみ〔下組〕	一	三五	したしみぬ〔親しみぬ〕	二	二六	したたらせ〔滴らせ〕	九	二七五
したぐも〔下雲〕	一	三五	したしみふかく〔親しみ深く〕	三	二六	したたらゝむ〔滴らむ〕	一	二七五
したげいこ〔下稽古〕	一	三五	したしみふかし〔親しみ深し〕	六	二六	したたり〔滴り〕	一四	二七五
したごころ〔下心〕	六	三五	したしみよれば〔親しみよれば〕	一	二六	したたりおちる〔滴りおちる〕	六	二七九
したごころ〔舌心〕	一	三七	したしむ〔親しむ〕	一七	二六	したたりあまる〔滴り余る〕	二	二七九
したごもり〔下籠〕	二	三七	したしめーる	二	二五	したたりおつる〔滴りおつる〕	二	二七九
したごころも〔下衣〕	三	三七	したしーも〔親しも〕	一四	二五	したたりて〔滴りて〕	四	二七九
したさき〔舌先〕	一	三七	したしーもーよ	三	二六	したたりやまゝず〔滴りやまらず〕	二	二八〇
したざわり〔舌触り〕	一四	三七	したしーよ	一	二六	したたる〔滴る〕	三	二八〇
したし〔親し〕	四	三七	したしよく〔下職〕	一	二六	したたるばかり〔滴るばかり〕	三	二八七
したし〔浸し〕	九	三七	したしらべ〔下調べ〕	一	二六	したたれーる〔滴れる〕	四	二八八
したじ〔下地〕	七	三九	したす〔浸す〕	六	二六	したたれーり〔滴れり〕	二	二八八
したしい〔親しい〕	二	三九	したすみ〔下隅〕	一	二七	したたれるーなり〔滴れるなり〕	一	二八八
したしき〔親しき〕	四	三〇	したずみ〔下積〕	六	二七	したつくにはら〔下つ国原〕	一	二八八
したしく〔下敷く〕	一	三九	したずり〔下刷り〕	一	二七	したつち〔下土〕	三	二八八
したしく〔親しく〕	三	三九	したぞめ〔下染め〕	二	二七	したづつみ〔舌鼓〕	六	二八九
したしくて〔親しくて〕	一七	四〇	したたか〔強か〕	六	二七	したつばら〔下っ腹・したつばら〕	二	二八九
したしけれ〔親しけれ〕	六	四〇	したたかに〔強かに〕	六	二七	したづみ〔下積み〕	一	二九〇
したしげ〔親しげ〕	五	四〇	しただみ〔細螺〕	一	二七	したつゆ〔下露〕	八	二九〇
したしさ〔親しさ〕	二	四〇	したたかもの〔強か者〕	二	二七	したつる	一	二九〇
したしまーれーつつ	二	四三	したたく〔下焚〕	三	二七	したて〔下手〕	六	二九〇
したしみ〔親しみ〕	二	四三	したたむ〔認む〕	六	二七	したてなおし〔仕立て直し〕	三	二九〇

したてや〔仕立屋〕	一	二九〇	したまち〔下街・下町〕	三	二九六	しだりお〔垂り尾〕	四	三〇〇
したてり〔下照り〕	五	二九〇	したまてーば〔下待てば〕	一	二九六	したりがお〔したり顔〕	三	三〇〇
したてる〔仕立てる〕	四	二九〇	したまどひーつつ〔した惑ひつつ〕	一	二九六	しだりやなぎ〔枝垂り柳・垂り柳〕	一六	三〇〇
したてる〔下照る〕	六	二九二	しーたまふ〔したまふ〕	六	二九六	しーたる	一五	三〇〇
したどい〔下樋〕	一	二九二	したまわる〔下廻る〕	一	三〇〇	しだる〔枝垂る〕	一三	三〇一
したなく〔下泣〕	六	二九二	したみ〔下見〕	五	三〇〇	しだるる〔枝垂るる〕	一七	三〇一
したなめずり〔舌なめずり〕	三	二九二	したみず〔下水〕	六	三〇〇	しだれえだ〔枝垂枝〕	一	三〇一
したね〔下根〕	一	二九三	したみち〔下道〕	二	三〇一	しだれさく〔枝垂咲く〕	二	三〇一
したは〔下歯〕	一	二九三	したむき〔下向き〕	二〇	三〇三	しだれぎくら〔枝垂桜〕	二六	三〇二
したは〔下葉〕	三	二九三	したむく〔下向く〕	一	三〇四	しだれーつつ〔枝垂つつ〕	一	三〇三
したばえ〔下生〕	二	二九四	しためづかひ〔下目使い〕	一	三〇四	しだれーて〔枝垂て〕	二〇	三〇三
したばか〔舌痴〕	一	二九四	したもえ〔下燃〕	四	三〇四	しだれはぎ〔枝垂れ萩〕	一	三〇三
したばたらき〔下働き〕	一	二九四	したもえ〔下萌〕	二五	三〇四	しだれやなぎ〔枝垂れ柳〕	二二	三〇三
したばら〔下腹〕	二	二九四	したもつれ〔舌縄れ〕	一	三〇四	しだれる〔枝垂る・垂れる〕	一七	三〇四
したばり〔下張〕	一	二九四	したもみじ〔下紅葉〕	二	三〇四	したわく〔下枠〕	一	三〇四
したはーるる〔慕はるる〕	五	二九四	したや〔下谷〕	二五	三〇四	したわし〔慕わし〕	一	三〇四
したび〔下火〕	二	二九四	したやく〔下役〕	一	三〇五	したん〔紫檀〕	五	三〇四
したび〔下辺〕	六	二九五	したやみ〔下闇〕	三	三〇五	したん〔指端〕	一	三〇四
したびえ〔下冷〕	四	二九六	したよど〔下淀〕	二	三〇六	しだん〔師団〕	一〇	三〇四
したひーて〔慕ひて・したいて〕	三	二九六	したよみ〔下読〕	一	三〇六	しだん〔指弾〕	二	三〇五
したひゆく〔慕ひゆく〕	一	二九六	じだらく〔自墮落〕	八	三〇六	じだん〔示談〕	一	三〇五
したふ〔下生〕	二	二九六	しーたり	一六	三〇六	しだんーさる	一	三〇五
したふ〔慕う・慕ふ〕	三	二九六	しだりうめ〔垂り梅〕	一	三〇〇	しだんしれいぶ〔師団司令部〕	一	三〇五
したべ〔下辺〕	五	二九六	しだりえだ〔枝垂り枝〕	一	三〇〇	しだんちよう〔師団長〕	四	三〇五

したゑまはしき〔下笑まはしき〕	一	三三	しちよう〔紙帳〕	二〇	三三	しっかん〔失陥〕	一	三六
しち〔質〕	七	三五	しちよう〔仕丁〕	一	三三	しっかんせつ〔膝関節〕	二	三六
しちいれ〔質入れ〕	一	三六	しちよう〔市長〕	七	三三	しずきゝて〔沈著きて〕	一	三八
じちかい〔自治会〕	七	三六	しちよう〔視聴〕	二	三三	しっきやく〔失脚〕	一	三八
しちかい〔七階〕	三	三六	しちよう〔思潮〕	六	三三	じつきよう〔実況〕	二	三八
しちかいき〔七回忌〕	四	三七	じちよう〔自重〕	二	三三	しつぎよう〔失業〕	一七	三八
しちく〔紫竹〕	一	三七	じちよう〔自嘲〕	一八	三四	じつぎようか〔実業家〕	一	三八
しちぐさ〔質草〕	三	三七	じちようする〔自嘲する〕	二	三四	しつぎようしゃ〔失業者〕	七	三八
しちごうめ〔七合目〕	四	三七	しちりがはま〔七里ヶ浜〕	三	三四	しつぎようとうろく〔失業登録〕	一	三九
しちごさん〔七五三〕	七	三七	しちりよう〔七西〕	一	三四	しづく〔雫・滴・しづく〕	二九	三九
じちたい〔自治体〕	二	三七	しちりん〔七輪〕	二五	三四	しづく〔沈著く〕	一	三四
しちだい〔七代〕	二	三七	じちん〔自沈〕	二	三五	しつく〔疾駆〕	一四	三四
しちながれ〔質流〕	一	三七	じちんさい〔地鎮祭〕	一	三五	しつくい〔漆喰〕	八	三五
しちねんき〔七年忌〕	四	三八	しつゐ〔失意〕	二	三五	しつくす〔為尽くす〕	四	三五
しちへんげ〔七変化〕	一	三八	しつう〔歯痛〕	七	三五	しつくする〔疾駆する〕	五	三五
しちほう〔七宝〕	七	三八	しつおん〔室温〕	二	三六	しつくりと	五	三五
しちめんちよう〔七面鳥〕	九	三八	じつか〔実家〕	一八	三六	しつけ〔躰・仕付け〕	二	三五
しちもつ〔質物〕	一	三〇	しつか〔膝下〕	四	三六	しつけ〔湿気・湿気〕	一五	三五
しちや〔七夜〕	五	三〇	しつがい〔室外〕	一	三六	じつけい〔実景〕	一	三五
しちや〔質屋〕	七	三二	しっかく〔失格〕	二	三六	じつけい〔実刑〕	一	三五
しちゆう〔シチュー〕	二	三二	しっかと〔確と〕	三	三六	じつげつ〔日月〕	三	三七
しちゆう〔市中〕	四	三二	しっかり	二	三七	しづけーる〔沈著ける〕	一	三七
しちゆう〔支柱〕	一	三三	しっかりと	一	三七	しつげん〔湿原・濕原〕	一	三七
じちよ〔自著〕	一	三三	しっかん〔疾患〕	一	三七	じつげん〔実現・實現〕	六	三八

じっけん〔実験・實驗〕	五	三六	じつせいかつ〔実生活〕	一	三六	じつちよく〔実直〕	二	三七
しつげんちたい〔湿原地帯〕	五	三六	しつせき〔叱責〕	一	三六	じつづき〔地続き〕	二	三七
しつこう〔執行〕	三	三六	じつせき〔実績〕	一	三四	じつてい〔実弟〕	一	三七
しつこき〔しつこき〕	一	三六	じつせん〔実戦〕	六	三四	しつでん〔湿田〕	三	三七
しつこく〔しつこく〕	二	三六	じつせん〔実践〕	二〇	三四	じつと	五	三六
しつこく〔漆黒〕	二	三六	しつそ〔質素〕	八	三四	しつど〔湿度〕	二〇	三六
しつこく〔桎梏〕	二	三六	しつそう〔疾走〕	七	三四	しつと〔嫉妬〕	二四	三七〇
しつごしょう〔失語症〕	二	三六	しつそう〔失踪〕	一	三五	しつとう〔執刀〕	二	三七〇
じつさい〔實際〕	三	三六	じつそう〔実相〕	七	三五	しつとする〔嫉妬する〕	一	三七〇
じつざい〔實在〕	五	三六	しつそうする〔疾走する〕	七	三五	しつとり	二	三七〇
じつざいかん〔實在感〕	一	三六	じつぞん〔実存〕	五	三五	しつとりと	三	三七二
しつさく〔失策〕	三	三六	しつた〔叱咤〕	七	三五	じつとりと	四	三七三
しつし〔執し〕	三	三六	しつたい〔失態〕	一	三六	しつない〔室内〕	三	三七三
しつし〔嫉視〕	三	三六	じつたい〔実体〕	四	三六	じつに〔実に〕	九	三七三
じつし〔実子〕	三	三六	じつたい〔実態〕	二	三六	しつねん〔失念〕	一	三七五
じつし〔十指〕	五	三六	しつたする〔叱咤する〕	三	三六	しつぱい〔失敗〕	二	三七五
じつし〔実施〕	一	三六	しつたつり〔執達吏〕	一	三六	しつぱいする〔失敗する〕	一	三七六
じつしゃ〔実写〕	三	三六	じつだん〔実弾〕	三	三六	しつびつ〔執筆〕	四	三七六
じつしゃ〔実射〕	一	三六	しつち〔失地〕	二	三六	しつぷ〔湿布〕	六	三七六
じつしゅう〔実習〕	四	三六	しつち〔濕地・湿地〕	三六		じつふ〔実父〕	二	三七六
じつしゅう〔実収〕	一	三六	じつち〔実地〕	一	三七	しつぼう〔疾風〕	二四	三七六
しつしん〔湿疹〕	四	三六	しつちたい〔湿地帯〕	九	三七	じつぶつ〔実物〕	四	三七九
しつす〔失す〕	一四	三七	しつちよう〔失調〕	二	三七	しつぺい〔疾病〕	四	三七九
しつせい〔失政〕	一	三七	じつちよう〔十町〕	一	三七	しつば〔尿壺〕	一	三八〇

しっぱ〔尻尾〕	四	三〇	じつわ〔実話〕	一	一五	じてん〔字典〕	二	二八
しっぽう〔七宝〕	七	三二	して	六	三五	じてんしゃ〔自転車〕	一〇	三九
しっぽう〔失望〕	七	三二	して	二	三五	してんちよう〔支店長〕	二	三九
じっぽう〔十方〕	七	三二	しで〔死出〕	四	三六	しと〔使途〕	六	三九
じっぽう〔実包〕	二	三三	しで	一	三六	しと〔使徒〕	一〇	三九
しつぼうする〔失望する〕	三	三三	してい〔師弟〕	六	三六	しと〔尿〕	一五	三九
しつぱく〔質朴〕	一	三三	してい〔指定〕	二	三六	しとう〔指頭〕	六	三九
じつぱさんゆ〔実母散湯〕	二	三三	しでかす〔仕出かす〕	一	三六	しどう〔始動〕	五	三九
しっぽりと	二	三三	してき〔私的〕	一	三六	しどう〔市道〕	二	三九
しつむ〔執務〕	八	三三	してき〔指摘〕	二	三六	しどう〔指導〕	三	三九
しつめい〔失明〕	三	三三	してき〔史的〕	三	三七	しとう〔死闘〕	八	三九
しつもん〔質問〕	九	三三	じてき〔自適〕	四	三七	じどう〔自動〕	一	三九
しつよう〔執拗〕	三	三三	してきす〔指摘す〕	一	三七	じどう〔児童〕	七	三九
じつよう〔実用〕	二	三四	してきりんち〔私的制裁〕	一	三七	じとうが〔児童画〕	一	四〇
しつらう〔設う〕	三	三四	してつ〔私鉄〕	一	三七	しどうき〔指導機〕	一	四〇
しつらえる〔設える〕	一	三四	しでーのーたび〔死出の旅〕	三	三七	じどうきやくしゃ〔自動客車〕	一	四〇
しづりーて	一	三四	しでーのーたびじ〔死出の旅路〕	一	三七	じどうきよういくしゃ〔児童教育者〕	一	四〇
しつりよう〔質量〕	一	三四	しでーのーやま〔死出の山〕	四	三七	じどうげき〔児童劇〕	一	四〇
じつりよく〔実力〕	三	三四	してみると	一	三七	じどうけんしょう〔児童憲章〕	一	四〇
しづれ〔雪墮〕	二	三四	してん〔支店〕	四	三七	じどうこうえん〔児童公園〕	一	四〇
しつれい〔失礼〕	二	三五	してん〔視点〕	四	三七	じどうさくひん〔児童作品〕	一	四〇
じつれい〔実例〕	四	三五	じてん〔時点〕	二	三六	しどうしゃ〔指導者〕	八	四〇
しづれーたる	一	三五	じてん〔自転〕	四	三六	じどうしゃ〔自動車〕	五	四〇
しつれん〔失恋〕	一〇	三五	じてん〔辞典〕	二	三八	じどうしんり〔児童心理〕	一	四三

じどうとう〔児童塔〕	一	四三	しとやかに	二	四六
しどうひょう〔指導標〕	二	四三	しとる〔濕る〕	五	四六
じどうゆうえんち〔児童遊園地〕	一	四三	しどろ	一	四三
しとき	一	四三	しどろなり	一〇	四七
しとく〔至徳〕	一	四三	しどろなる	一八	四七
じとく〔自得〕	三	四四	しどろに	四六	四八
しどけない	一	四四	しどろもどろ〔しどろもどろ〕	一三	四九
しどけなき	一四	四四	しな〔支那〕	四九	四九
しとしと	二七	四四	しな〔嬌態〕	二	四四〇
じとじと	三	四五	しな〔市内〕	三	四四〇
しとしとと	七〇	四五	しな〔撓い・撓ひ〕	五	四四一
じとじとと	二	四六	しな〔竹刀〕	三	四四二
しとしとに	七	四六	じない〔寺内〕	一〇	四四二
しとと〔巫鳥〕	四	四七	じない〔地内〕	三	四四二
しとど	一九	四七	しないでんしゃ〔市内電車〕	一	四四二
しとどなり	二六	四九	しなう〔撓う・撓ふ〕	五	四四二
しとどなる	四〇	四〇	しなえ〔撓え・萎え〕	一三	四四四
しとどに	九	四二			
しどなき	一	四三	合計	一九五	首
しどにー〔シドニー〕	二	四三			
しとね〔茵・蓐・褥〕	五	四三			
しどみ〔蔀〕	三六	四四			
しどみ	三三	四五			
しとやかな	五	四六			

秋草は地に静まりたりけり何をたづねてわれはやひとり	井上雪下
秋の風遠き空よりふき来りわが倚れる樹にしづまりにけり⑥	金子薫園
秋めける夜空にいでし二十日月ねいりばなにてしづまりにけり③	岡麓
朝雨の駅の広場に屯せる少女産業工はしづまりあへり	広野三郎
朝の光さし入る土間の雑魚の群一ときはねて静まりにけり①	山下陸奥
朝はやき稻田の青のしづまりを見つつ立つとき水鶏なきつぐ⑥	鹿兒島壽藏
朝やけのあかりしづまり、ほの暗し夏ぐれけふる島の藪原	釈迢空
あさやけの雲たゆたへばあからひく霧は沢間にしづまりにけり	宮崎茂
足立ちし一つの実例を聞きをりて苦しき息のしづまり行くか②	高安国世
あたたかき大和の冬に七夜ねてわななく胸のややしづまりつ	土屋文明
新しき年のはじめにむらぎもの心しづまり国祝がむとす⑬	斎藤茂吉
新しき冬の来向ふ野づかさにあしたきはだつ黄のしづまり③	鹿兒島壽藏
あらはなる白砂の谿のしづまりに光伴ふ空の遙けし③	初井しづ枝
あふむけに蛇死にてあり藪かげの水たまりしづかに静まりかへり①	栗原潔子
あまづたふ日は高きより照らせれど最上川の浪しづまりかねつ⑮ （白き山）	斎藤茂吉
荒き風静まりにけり水の上に月の光のうつれるを見む③	杉浦翠子
暴風雨過ぎて家流れむとせし町に夜半着きしかば静まりかへる④	竹尾忠吉
あらはれし暗礁の上に潮のみちさわだつ波もしづまり行きぬ⑭	松村英一
あれあとの雲を染めたる黄の光街にながれて静まりにけり⑥	松村英一
あれあとの坂にちらばる青き葉のひとつとつに静まりひかる③	島木赤彦
暴風過ぎし葉裏も見せてあびきたる癖のままなる樹々のしづまり②	若山牧水
あをあをと湛へ静まり湧ける湯の聞えぬかとをれば聞ゆる如し②	鹿兒島壽藏
碧き色はつかに見せて北にひらく空静まりぬ暮るる間際を②	塚田菁紀

青谷の上に延びたる朝影の闇けゆく時の樹木のしづまり⑩	松村英一
青によし奈良はも恋しわがひの祖の神はしづまりませり①	九條武子
家ごもりしづまり居れどつせみの老びとなれば病むときに病む⑯	斎藤茂吉
いかならむ年の明くるやもろもろの清きしづまりを聴き澄ますとき②	初井しづ枝
衣架にして袈裟暮れこのる金色にゆふべ伽藍の大きしづまり③	千代国一
息づまるばかりに怒りしわがころしづまり行けと部屋を閉しつ⑩	斎藤茂吉
いくたひか火事ありし市の一区劃漂ふ灰も静まりゆきぬ①	大野誠夫
いく処にも草光りつつ浜原は冬来りたるいまのしづまり④	遠山光荣
池の波静まりかねつ冬ざりて木枯の風やむ日なければ①	遠山光荣
石垣におはへる鳶はこのごろは若葉のまへの赤きしづまり①	花田比露思
石川のきよき流れの極まりに厳おほきくとはのしづまり （のぼり路）	佐藤佐太郎
石組の根元根元につはぶきの花黄に咲きて庭の静まり （右二首万福寺）（龜石庄）	斎藤茂吉
いたづらに抱くよつの緒世の浪のしづまりはてむ時やまつらむ① （よつ）	椋木豊文
の緒・琵琶のこと	井上通泰
稲原にむらがりをりし白鷺は夜の古墳にしづまりけんか⑤	鹿兒島壽藏
いにしへもありにけむかも大杉のしげき山に神しづまります⑦	松村英一
いましばし名張の山の暮れゆく悲しきまでに青きしづまり①	堀内通孝
今しばし砲のけむりのしづまりに浜見ゆるとき心はたぎつ①	佐藤佐太郎
芋畑にしぐれ雨降る音きこゆ昼の厠にしづまり居れば	結城哀草果
入りきたる厨に蠅のとべるのみ荒涼として静まりゐたり①	鈴木幸輔
岩こゆる波のひぶきの漸くに西日となりて四方のしづまり	小暮政次
飢のごとき心しづまり買ひし本いだきて歩む年暮るる街を②	田谷鋭

うちひらく人造湖相模の山水の湛へしづまり夜のおもほゆ⑧
 愁へつつ祖母はふる火の渦のしづまり行きて暁ちかからむ②
 駅下りてねしづまりたる町を過ぎやがて月夜の海に沿ふ道②
 大海の荒れたる後の静まりに似たる日もあり世を送るかな①(清登)
 大君のちとせをよばふたづがねに松のあらしはしづまりけり
 大まへに畏みたてば白き布かぜにふくらみ静まりにけり
 起きいでし暁の空は海のごとく晴わたりたる山のしづまり①
 おそろしき雨となるらし雲のもとに梧桐の青葉はしづまりはてつ②
 大き小さき二つの時計此の夜更の寒きしづまりに時をし刻む①
 大君のちとせをよばふたづがねに松のあらしはしづまりにけり
 大寺の内外に人らみちみちてどしんと静まりかへりけるかも⑧
 思ひつめて病むばかりなる恋しきもしづまりきたる秋のおもひに
 街路樹の喘ぎしづまり物かげを人檻樓の如く立上りゆく
 陰の尾根夕日のごとく尾根もある枯生しづまり誰も見えなく⑧
 下弦の月ひかり放たずおちにけり草木静まりてわが命おもふ
 風が掃きししろき地表と植物の静まりと夜の何かを迎へて②
 風しづまり寒さ刺すごとし夕あかり白き刈田の間をすぎゆく⑪
 風波はしづまり行きて泊つる船吃水線を高くあらはす⑦
 風のあといたく静まり川渚浅きに寄りて魚らはをり⑧
 風のおとにもしづまりはてし雪のうちにふく笛のねの清くもあるかな
 ①
 傍にまさしく祖父いますぞと思へば脈も静まりゆきぬ②④
 悲しびに堪へたるもののすがたとも月照る谷のとはきしづまり①
 壁の上にしづまり居りし甲蟲がいまだ動かさず山あらしの雨⑬(青)

高田 浪吉
 斎藤 茂吉
 藤原 東川
 和田 山蘭
 尾上 柴舟
 松村 英一
 藤森 朋夫
 菊池 知勇
 鈴木 金二
 尾上 柴舟
 金子 薫園
 與謝野 晶子
 小暮 政次
 高田 浪吉
 北見 志保子
 田谷 鋭
 金子 薫園
 松村 英一
 宮 柊二
 明治 天皇
 吉井 勇
 堀内 通孝
 斎藤 茂吉

神山のみ庭のみ湯にしたりつつ静まりをれば杉鳴るきこゆ
 蚊張透きて月無き夜の山黒し一吹き風のしづまりにけり②
 枯草を囲む家並とそこばくの木立はありてふかき静まり
 瓦礫など見つつきたりておもほへず川ながれをり藍のしづまり①
 黄いろなる花粉もこほる夜の座にしづまりをれば何にかよはむ③
 汽車去れば又も黄いろきかれ麦の野となり昼を静まりにけり(新萬葉集八)
 傷いて心しづまり居りしとき遺骨くるてふ報道を見ぬ(支那事変戦地)
 傷負はず我は睡たしいささかの鳳仙花赤く静まり咲けり
 昨日の夜の雨をとどめしけれなるの茎の赤麻はしづまり立てり④
 黄の瓦碧き瓦のみたまやしづまりいますことの尊さ⑧
 桐畑の上の空にはなほ高く今日の夕日しづまりて見ゆ②
 茎のゆれしづまりぬれば花のかたちまたくとのひ安けくし見ゆ④
 草がれの山の麓の古りし沼しづまり深く夕ぐれにけり
 くだらより帰り来ましてうちつ国守るはことしづまりにけむ②
 国はらは夕べむらさきたなびきて林々の静まりにけり(新年御歌会始)
 汲みかへし砥盥の水しづまりて鳳仙花こそ映り澄みけれ(あをぞら)
 雲なべてうごきたりしが暴風来むけはひしづまりもろ蟬のこゑ⑬
 雲群は生けるがごとく山襲にしづまりゆきて富士暮れそめぬ①
 昏くなる空を占めたる桃の花今日の一日の風のしづまり
 鶏頭の朱深みゆく朝夕をしづまりがたきわが心かな②
 けふの日のくやしき心おのづからいまは静まり寂しと言はじ③
 濠岸のさむき春日にくたびか羽ぶきし鴨の居静まりたる③
 午後六時煙たえたる工業地に今日の光のてれる静まり
 心迷ひしづまりけるが今にして時既に遅し老いにけるかな(小笠生)

藤沢 古実
 小田 観螢
 中安 瓊三
 大野 誠夫
 生方 たつゑ
 山崎 等
 田中 賀津緒
 宮 柊二
 生方 たつゑ
 斎藤 茂吉
 斎藤 喜博
 相馬 御風
 結城 哀草果
 井上 通泰
 土屋 文明
 広田 健次
 斎藤 茂吉
 鈴木 幸輔
 小暮 政次
 山崎 一郎
 西村 陽吉
 鹿兒島 壽藏
 土屋 文明
 岡 麓

このねぬる朝の霧の山あひにうごくに見えてしずまりぬらし
 この冬のよき日の晴に風二つあがりしずまり昼たけにけり④
 咲ききりし花のゆたけさ木槿の細枝はゆれてしずまりにけり③
 咲き凝らす大椿の花ゆるゑに部屋ぬちの夜は静まりにけり③
 木履をこつこつと判り暑からし息づきあます深きしずまり
 さ夜中と夜はしずまりから衣うつおとたくなりまさりけり①
 沢の水鳴るところ群生の露育ちこのしずまりの渦なすばかり①
 四五十羽群れたる詐欺は白し白し木の上にくだりしずまりにけり⑦
 地震のゆれしずまりにけり窓外の月夜の浜はゆく人のなき⑤
 地震も火もしずまりゆきて庭に敷く戸板の上に骨碑あそびす(碧潮)
 静やかにいはれぬことも書きて見る窓かけ風にしずまりにし日④
 静心しずまりかねつ酒持ちて秋山さして出でゆくわれは
 生ありし一日の音過ぎにきところ静まり夜の部屋に立つ⑤
 十二月日はありふれの忙しさに苛立しさはしずまりがたし⑦
 障子にうつる干楠の影うそ寒し秋の日あしのしずまりにつつ
 上代の智慧千年の暗き静まり美意識過剰そして深き信仰①
 障子あけてしずまりをれば庭土にみ山の鳥の下りて去りにし
 白壁のひびが誰かの顔の見え病臥の心しずまりかねつ①
 新芽さす一木しずまりその下のいははは夕べ既に見がたく④
 杉の木の手秀のしずまりを見つゝて後幾年の命をぞおもふ(のほり路)
 すめらぎのいまし立たすと神垣の内外しずまり散るさくら花①
 蟬一つたたき殺して鋭ごころのしずまりゆくにたらぬものあり⑨
 洗面器に汲みたる水に砂粒のしずまりゆけり寒きあかつき⑥
 そよ風もなき朝庭のしずまりに遠くかそかに山鳩のこゑ⑥

田中周三
 太田水穂
 松田常憲
 川田順
 北原白秋
 明治天皇
 浜梨花枝
 松村英一
 松田常憲
 岡崎義恵
 尾上柴舟
 若山牧水
 宮柊二
 高田浪吉
 村野次郎
 印田巨鳥
 久保田不二子
 菊山当年男
 小暮政次
 斎藤茂吉
 中河幹子
 岡野栄一
 鹿兒島壽藏
 花田比露思

空たかく吹きゆく風のしずまりに吾が妻に甘えぬる猫の声①
 抱いて寝る猫をとりあふ子等の声しずまりゆけば吾あり妻あり②
 台風風雨しずまりしひとときにきこえて蟬の確かなるこゑ③
 手力雄の神のみ魂は戸がくしの荒山奥にしずまりいませる⑥
 竹群の葉のいただきのしずまりに及びてながし今朝の朝焼(毎日歌壇)
 手力雄の神のみ魂は戸がくしの荒山奥にしずまりいませる⑥
 たたへたる池のおもての静まりに折れ伏すものはみな杜若⑬
 脱獄に似たる思ひも交へつつ寝しずまりたる東京を出づ⑤
 立つる声持たざる魚の棲むゆゑか無限に通ふふかきしずまり(金婚)
 溪々にひそみ静まり白雲のこの朝立たず峰晴れにけり
 たまさかに吹く冬の間のみなみ風しずまり行けばくもる夕空⑩
 街より砂塵は白く立ちながら昼を吹く風しずまりがたし⑧
 塵ほこり雨にしずまりこの路地をあくた車は引き出されけり
 血を喀きし心静まり気がつけば庭のすいとが二つ鳴くこゑ(新萬葉集)
 月おちてあくるにまあり目にたちて霧の動きのしずまりにけり②
 月かげに霧は晴ゆく真竹藪風のそよぎはしずまりにけり①
 月夜にゆく道のかたはらの榎林しめらにさやぎきて又しずまりつ③
 土も木も静まり深き枯野にて喪の一团は饒舌ならず①
 鉄条網へだつる夜の喧噪のしずまりゆくと石油をみたす①
 寺の辻月夜をひらく葺市のさやぎしずまり降るしぐれかな⑩
 手を焙るひとときのまのしずまりをそくそくとうつ心は何か③(現代短歌大系)
 天を打つ冬の浪、風ぎしずまり、蒼海遠くうかぶ白雲⑫
 東京の町すでに火のいるしずまりに最遠き山の雪見ゆ⑪

小暮政次
 千代国一
 横田専一
 太田水穂
 稲田久雄
 太田水穂
 松村英一
 中原綾子
 三谷千里
 若山牧水
 松村英一
 高田浪吉
 四賀光子
 畑中康夫
 松田常憲
 松田常憲
 木下利玄
 富小路楨子
 御供平信
 安江不空
 鹿兒島壽藏
 金子薫園
 釈迢空

遠き森霧らひわたれる朝霧の前に素枯れし萱のしずまり①	池原 檜 雄
時のあひだ冬木の鳴りの静まりにおほに音あり風吹く大空④	島 木 赤 彦
土用波幾日かあれし海に向く砂村の家居しずまりにけり (新萬葉集三)	小 泉 登美子
トラツクのあげゆきて埃しずまりし暑の光すみ来鉄板の上に③ (角川文庫)	木 俣 修
鳥一羽よがりて谿はすさまじき死の静けさにしずまりにける⑥	太 田 水 穂
とりいでて書をやよまむぬばたまの夜は心もしずまりにけり②	明 治 天 皇
中空に明のこりて街とほき東も北もしずまりにけり①	佐 藤 佐 太 郎
啼きすます小鳥は一羽あたりの木ひかりしずまり小鳥は一羽	若 山 牧 水
鳴き立てるさつきの蟲は爽かなる浅夜となりて静まりにけり	富 永 波 留 男
夏ちかき空晴れわたり雪谿に見えをる雪はしずまりにけり①	山 口 茂 吉
夏早く至れる山や草叢にはげしく紅き躑躅の静まり① (角川文庫)	宮 柊 二
浪やうやくしずまりくれば見えしといふその島影のわが眼にもみゆ⑮	土 岐 善 麿
にはひたる畳のうへに白たまの静まりたるを見すぐしがてぬ①	斎 藤 茂 吉
庭蔭の群がる青のしずまりを見つししばらく病む君に寄る⑥	鹿 兒 島 壽 藏
ぬかづくに眼がひ熱しとこよべに神としずまりいませり君は③	四 賀 光 子
ねぶる子の胸にうつ血の、とどこほる、ほのしずまりに、たゆたふ思	釈 迢 空
ひ⑨	釈 迢 空
野は、昼のさえしずまりに、雑木山あらはに、赤き肌見せてゐる⑨ ざんぎやま	釈 迢 空
飲み余すコップに泡のしずまりゆき旅の終りごとく対ひき	三 国 玲 子
野ら猫の尾を吊るし持ちまこふたつに斬れこそ心しずまりにけれ①	與 謝 野 寛
はかなさの今かしずまり来るらし青葉の曇り嬌がいふこゑ (多磨四)	岩 間 正 男
墓原にしずまり古りしみ仏はこの降る雨を憂しともいはず②	矢 部 道 氣
はしやげる卓を隔つる護謨の木のみづからがもつ暗きしずまり②	初 井 し づ 枝

芭蕉葉にときのま雨をこぼしたる夕べの雲はしずまりにけり (新万葉集二)	河 野 慎 吾
はちす田に匂ひ静まり暮れかたを閉ぢ残りたるひとつ花びら①	池 原 檜 雄
花芽指す牡丹しずまりゐたりけり苑のいづべもゆふぐるるべく (増炎)	西 原 重 敏
葉につもる雪とばしつ山道はしずまりがたく風の吹きしく⑧	高 田 浪 吉
葉のさやぎしずまりあへぬ葦原にまたさやりつつ風流らへり②	木 下 利 玄
母の眼を盗みて浴みし泥川のけふの夕日にしずまりにけり⑫	松 村 英 一
腹の下にひよこを抱きて親鶏のしずまり眠るその静かさや④	島 木 赤 彦
はるかなる山なみの雪に日あたりて暫し天地にとほるしずまり⑫	斎 藤 茂 吉
春の木浅みどり葉の諸ゆらぎ若き命のしずまりあらぬ⑮	窪 田 空 穂
春の光窓よりさしてプールのうへ競泳のあとしずまりゆきぬ①	上 代 皓 三
春の雪おほくたまれり旅立たむ心しずまり炉にあたり居り③	島 木 赤 彦
春埃しずまりゆきし夕つかたあがなひて来し古書をきよむる	木 俣 修
春三月 みづき ころおきなく眺めたるもろもろの若葉しずまりにけり⑩ (多磨)	北 原 白 秋
ひつたりと風静まり月高し夜仕事終へてほくほくと帰る	松 倉 米 吉
ひとところ清き月さすかたはらにややありて児ら寝しずまりたる③	村 田 利 明
人の波静まりひらけ現つ神渡らす道の真直なるかも⑧	尾 上 柴 舟
人はみな寝しずまりたるさ夜中を寒木瓜の花しづかにしろし①	染 谷 進
人は皆寝しずまりたる夜を深く薬飲むこそさびしかりけれ①	植 松 寿 樹
一人ぬる夜の静まりに君が上悲しむことをせめてなごめり	望 月 光
病院の廊下を来つつこの朝胸こそをどれ静まり深きに⑥	窪 田 空 穂
ひりひりと蟲なくなべに鶏の紅 あか のときは静まりにけり (初火)	島 木 赤 彦
ひるがれる赤芽がしはの青葉の下ひと日の風もしずまりにけり⑪	松 村 英 一
ひろびろと見の和ましき芝紅葉匂ひしずまり日靄ぞふかき (花紅)	初 井 し づ 枝

灯を消せば樹々らしづまりわが頭上あらしめく夜の雲が走れり⑦
 吹く風に揺れて鳴りぬし竹藪のいまはしづまり春の雪ふる①
 ふくる夜の月の夜露やおもるらむ萩のさやぎもしづまりにけり②
 二上の雄だけの上にしづまります大津皇子の御墓をろがむ①
 舟一つ見えぬ山中の湖の夕しづまりや見下ろしくだる①
 冬の日のゆふべにちかくなりければやなぎの秀立しづまりにけり
 冬の陽はあまねくみちて山王の高台に木々静まり立てり④
 冬の夜の夜のしづまりにべんの音耳に入り来つ我がべんの音（新万葉集）
 古銀杏空にひろごりむら枝の夕ぐれとなればしづまりにけり②
 ボート波いつか静まり水底に定まりて来し樹立の影は②
 葬火のしづまりゆきし夜のほどろ骨となりしかわが祖父は（おはち）
 補聴器の静まりしかば入選者の低き声々やうやくきこゆ⑦
 まがつみの乱れ静まり神も人もころなごみて空澄めるらし
 真白蝶あまた居させてくれなるに咲ける花草静まりをるも⑥
 街中の高き公孫樹に梅雨のあめ降り撒りたる青きしづまり①
 松山はしづまり深しあたまのうへ夜目のたどりに暗くつらなり⑩
 まなうらにまだ揺曳し黄にひかる樹樹あれば心しづまりがたし③
 まむかひに歩みすすめば大神のしづまりまします大宮まぢかし①
 三河の国に通へる船がこだましてすぎたるあとの水脈のしづまり④
 御倉には御倉の神の御酒殿は御酒殿の神のしづまりいます①
 水草のあまねき池にゐる鯉のしづまりたるは眠りけるらし⑩
 水引の赤き花穂のしづまりに添ひてゆくとき瀬鳴り負ひるつ③
 道ばたより吾の見おろす芥子畑は風絶えし間の白きしづまり②
 峰々のとほきそきへにたたまれる雲のしづまり身に沁む吾は（新）

高安国世 山口不二花 明治天皇 久松潜一 松井如流 前田夕暮 小野昌繁 伊藤左千夫 豊島逃水 山田百合子 結城哀草果 長谷川銀作 伊藤左千夫 窪田空穂 千代国一 釈道空 栗原潔子 三井甲之 生方たつゑ 関得一郎 斎藤茂吉 初井しづ枝 堀内通孝 斎藤茂吉

むくむくと動くごとしといひしかど九十九谷のとはのしづまり⑩
 無限軌道のきしりしばらく地に震ひ聞とほくしてしづまりゆけり②
 虫の声しづまりにけりとのもりの朝ぎよめする時やきぬらむ
 虚しきを孕みて空にたてるものすさまじき鉄骨群の静まり⑧
 群葉張る蘇鉄のそよぎ今見ればひたとしづまり寒き日のいろ⑦
 物はみなしづまりはてしき夜なかににに昔の夢はさめけむ①
 もみいづる前のしづまり雨霧にけふりあふ丈低き落葉松⑤
 森ふかくしづまりいますみ仏の金色光ををろがみにけり④
 やうやくに発作しづまり歩み出づカラマゾフ家の下男のごとく①
 焼肉のけむりはびこる園のうちはやいでましとしづまりきたる
 安らけくしづまりませと禱りせし墓地に日暮の小糠雨降る①
 山城は国のまほらば桃山をととの宮居としづまりましぬ（新萬葉集）
 山高くしづまりまして田なつもの譲らす神をわれらをろがむ①
 山中の小学校は夏休み門をとぎしてしづまりにけり
 山に来て日の永きにも腹立ちし心やうやう静まりにけり④
 山々はくらくしづまりありしかば浅茅生の道行きつつ濡れぬ⑩
 山を背に池をひかへて弁財天しづまりいます赤のたに垣③
 夜目白く、花の梢の在り処見ゆ。とほしきものの、しづまりにけり⑩
 やや濁りしづまり黄ばむ夕日ざしつやめく枝にしばらくは在り②
 夕刊に心とられてありし間に機内静まり身は空にあり⑤
 夕ぐれの迫れる室に独り坐りしづまりがたく父のおもほゆ⑤
 夕雨のはれ間あかるし青麦の穂なみのうごき静まりにけり⑥
 夕されば高嶺に湧ける白雲の静まり早き秋となりにし
 夕されば山ふところゐる雲のしらじらとして静まりゆけり（多磨四）

斎藤茂吉 山本友一 明治天皇 高安国世 北原白秋 明治天皇 遠山光栄 島木赤彦 久保井信夫 鹿兒島壽藏 沼沢美代子 村上成之 藤原東川 北見志保子 尾上柴舟 斎藤茂吉 岡本大無 釈道空 植松寿樹 高田浪吉 松村英一 森二郎 白井正行